おいしそう！と言ってもいい水族館

最近の私の仕事での楽しみは、館内で魚たちを観察するとともに、お客さんも観察するということです。「しっかり仕事をしろよ」と言う声が聞こえてきそうですが、これが案外勉強になり、おもしろい発見もできるのです。

お客さんの声の中でよく耳にするのは「おいしそう」や「食べられるのかなあ」というものです。しかし、そこに飼育員が居合わせると、お客さんはたいがい申し訳なさそうな顔をします。大切に育てている水族館の魚たちを食べものとして見ていたことが飼育員にばれてしまった！と思うからでしょう。

ほとんどの水族館ではここで話は終わってしまうでしょうが、竹島水族館では時にニコニコしながら飼育員が話しかけてきて、話が弾んでしまうことがあります。その理由は、飼育員たちがその魚を食べた経験があり、魚の味を知っているからなのです（もちろん展示している魚や1日でも飼育した魚は食べたりはしません）。これは別に残酷なことではなく、人が魚を食べるのは当たり前のことですし、飼育員の魚のことを何でも知ろうとする研究意欲なのです。漁師さんから魚の味や料理法を詳しく聞くこともします。飼育員は生き物のことを知らないことには勤まりませんからね。

▲ずんぐりとしたこのカニ、食べられるのでしょうか？

時には、図鑑に「食用にならない」と書いてある種類にチャレンジすることもあります。文字通り試食です。「毒があるのならば、毒があるので食べてはいけないと書いてあるはずだろう。それなのに毒のないものが食用にならないのはなぜ？」という会話のもとに、まずその生き物について徹底的に調べ、おおよそ安全を確認したら挑戦です。何のことはない、ただおいしくなかったり、食べる部分が少なすぎたりすることが理由だった、などが行き着く結論です。しかし、これも大切な勉強であり、お客さんへの大きな情報になります。

ですから、館内の生き物を見て味の話をしているお客さんを見る時に、会話に参加するタイミングをひそかにうかがったりします。

生き物の外見や特徴を覚えるだけでなく、その中身から感じとれることまでをできるだけ楽しく理解してもらえるように、竹島水族館のチャレンジは、これからも続いていきます。

当然、むやみやたらと何でも食べているわけではないので、皆さんは、まねをしないでくださいね。

生き物と人の架け橋

竹島水族館では、こうして普段の活動（飼育業務や館内での説明など）と様々な特別企画の2つを土台として、生き物と人の架け橋となるような存在を目指しています。

水族館の楽しみ方や活用の仕方は人それぞれです。一人で来る方もいれば家族や友達、カップルで来る方、自由研究の宿題で来る子ども、絵を描きに来る方、川や海で見たことのない生き物を見つけて何なのか聞きに来る子どもたち、アシカショーに魅せられて何度も見に来る方、館内のイスに座り、魚を観ながら世間話を楽しむご婦人たちなど、本当にさまざまです。いろいろな方たちが利用してくださることは飼育員にとって素直にうれしいことですし、もっともっと頑張っていこうと思う活力になります。

▲人と生き物との架け橋になるのは飼育員の目標の1つです。

生き物という命あるものを展示している市内唯一の博物館の竹島水族館は、これからもチャレンジすることがいっぱいです。館内を歩いている飼育員を見かけたら、遠慮せず、ぜひ話しかけください。きっと面白いお話ができると思います。

竹島水族館
学芸員　小林　龍二